

平成31年度 労働災害防止論文 金賞

安全最優先を目指して

北海道クリーン・システム株式会社 高橋 真

労働災害はなぜ起きるのでしょうか。作業の慣れや過信により安全意識が薄れていき「いつも大丈夫だから」や「ちょっとくらいならいいか」等の自分勝手に不安全な行動が当たり前となり、基本的な作業手順やルールが省かれたままの作業を続ける事が労働災害に繋がる要因の一つであると私は考えます。労働災害を防ぐためには、安全意識を高め、慣れた作業といって甘く見ず、一つ一つの作業に責任を持ち、正しい作業手順で行うことが、労働災害防止に繋がると思っています。

私の勤める資源リサイクルセンターでは、3つの工場において産業廃棄物及び資源物の手選別及び機械による中間処理業務を日々行っています。私の職場は5年間無事故を継続していましたが、残念ながら今年の4月に労働災害が発生してしまいました。決められたルールが守られていなかったことや、安全対策が足りない面もあった等、作業に慣れ過ぎてしまったことが原因でした。工場での作業は、まだまだ私達が気付いていない様々な危険が潜んでいる可能性がある事を思い知らされました。このことを教訓とし、今後の事故防止対策として作業環境の改善と安全意識を向上させるため、2つの取り組みを開始しました。1つ目は、ヒヤリハット事例の検討会です。毎月、社員から体験したヒヤリハットを集めて、その中から事故に繋がるような事象を題材とし、社員全員で打合せを行い、改善活動に繋げています。事例としては、「工場内を歩行中に重量物の運搬作業に使用するハンドリフターが置いてあることに気付かず、足を引っかけて転倒しそうになった」というヒヤリハット事例がありました。原因として考えられたのは、足元の不注意の他、工場で使用するハンドリフターの保管場所が決められていなかったため、使用後に乱雑に放置されていたことでした。皆で事故を防ぐための改善方法を話

しあった結果、保管場所を決め、ラインを引くことで明確化し、使用後は、必ず保管場所に戻すルールを追加し再発を防止しています。2つ目の取り組みは、危険予知訓練です。日常巡回や月1回開催している作業主任者とのミーティングで注意すべき事柄をピックアップし、題材を決めています。危険予知訓練では、個別やグループ討議を行います。その中で特に意見が多いのは、作業手順の省略等、様々な不安全行動が事故に繋がる危険因子となることから、自らの行動や危険箇所を見直し、安全を意識した作業を徹底しようという意見です。しかし、いざ作業になれば安全意識が薄れ、不安全行動が多々見られるのが現状です。そのため、日々の作業の中で管理者や作業主任者の指示や声かけをすることにより気づきを持たせ、安全意識が薄れないようにしています。

私を含め社員一人一人が、労働災害事例やヒヤリハット事例を人ごとでは無く明日は我が身と考え、危機感を持つことが重要だと考えます。労働災害を全て無くすことは難しいことですが、少しでも事故の発生リスクを軽減させることは出来るはずです。

安全意識の改革は一朝一夕では出来ず、時間がかかるとは思いますが、まずは決められたルールを再確認するための勉強会の継続と日常巡回や現場指導を強化して行きます。ヒヤリハット事例検討会や危険予知訓練といった労働災害防止対策については、取り組みそのものを形骸化させないように都度見直しを図りながら継続実施し、自分も含め社員一人一人の安全意識を高めて行きたいと思っています。

今後も、事故により仲間に悲しい思いをさせることのないよう、皆で協力し合い安全最優先を合言葉に声を掛け合いながら、安全で働きやすい環境を創ることで労働災害を防止して参ります。

平成31年度 労働災害防止論文 銀賞

業務災害(針刺し事故)と対策

北海道クリーン・システム株式会社 加藤 憲 太

私達清掃業務に携わる者にとって針刺し事故による業務災害は絶対に起こしてはなりません。

清掃業務はあまり危険な職業というイメージは無いと思われるかもしれませんが、針刺し事故はいつも身近に潜んでいます。

針刺し事故の事例と私の職場で取り組んでいる針刺し事故防止の対策を紹介いたします。

近年、商業施設内のトイレにインスリンの針がゴミ箱やサニタリーボックスの中、又は床に無造作に捨てられている事が多くなってきています。

それが注射針と気づかずゴミと思い、回収した清掃スタッフが指に針を刺すという事故が発生しています。

また、病院の現場では商業施設に比べ針刺し事故の可能性が格段に上がり、私の知っている病院で起きた針刺し事故事例では、清掃スタッフが医療用廃棄物の入ったゴミ袋から飛び出してきた大型注射針が厚手のゴム手袋を貫通して指に刺さった事例があります。(この注射針は、医療用廃棄物ゴミ袋に本来廃棄されるべきではありません。)

もう一つは、清掃スタッフが床清掃中にモップにゴミが絡まって除去した際、そのゴミの中の注射針に気づかず指に刺してしまうという事例です。

このような事例は、針刺し事故による感染症(HIV、C型やB型肝炎ウイルス等)に繋がるため、重大な事故と捉え私たちの職場では、従業員全員にどんな場所でも常に危険を予測しながら日々の業務に務める様に朝礼等を通じて指導、注意喚起をしています。

針刺し事故を防止するには具体的にどうすればいいのか、私の職場の取り組みを紹介し事故防止の一助になれば幸いです。

① 床に落ちているいかなるゴミも素手で触らない。

分別するときはトング等を使用する。

② ゴミ袋を手で抑えて圧縮しない。

圧縮する必要がある場合は道具を使用する。(ゴミ圧縮用のコンパネで作成した天板上から押す)

③ 運搬時はゴミ袋が体に触れないように抱えないで離して持つ。

この3項目を徹底しなければ事故は防げないと指導しています。

その他にも注射針を発見した場合、注射針を保管する容器をSK室に常備しています。

また、注射針を発見した日の終礼と翌日の朝礼で、いつ・どこで注射針が発見されたかを従業員に現物を見せて周知しています。

万が一針刺し事故が発生した場合の応急処置には次の様な方法を指導徹底しています。

① 出血部分の根元を押さえ、血液を絞り出し、患部を流水等(水道水)で洗い流す。

② 発見した注射針を専用の容器に保管する。

③ いつ・どこで、発生したのか具体的に現場管理者に直ちに報告させる。

④ 発生後、直ちに病院に行き治療、検査を受ける。この時には、職場管理者が同行することとしています。

以上の事柄を確実に実施し、その後、針刺し事故の注意喚起を朝礼、終礼で繰り返し行っています。

私達は、日々同じ作業をしていると必ず慣れが生じます。

その慣れが業務災害を起こす原因の一つであり慣れた作業においても、周りに危険がないかを常に予測し作業をする必要があります。

私もヒヤッとしたこと、ハッとしたこと等、また、事故が起きそうな場所や要注意箇所を事前に把握し、ハザードマップに反映させ、従業員同士で共有しています。

この取り組みを継続することで、従業員一人ひとりの安全意識を高めて、針刺し事故、転倒事故等の「業務災害防止」への徹底を図り、従業員の安全確保、事故撲滅に全力で取り組んでいきます。

平成31年度 労働災害防止論文 銅賞

シニア世代における働き方と労働災害について

ホクビサービス株式会社 大橋 玲子

現在日本における平均寿命の向上に伴い、働く人の平均年齢も上昇している。老後2,000万円問題が物議を醸し、年金受給資格も65歳から67歳に引き上げられるのではないかと、と言われる昨今、ビルメンテナンス業界で、求人募集をすると60歳代の応募が多くみられる。元気なシニア世代が活躍してくれるのは、会社サイドとしても国からの助成金の対象となるし、働き手サイドとしても、年金だけでは不安な時代でもあるため、働ける場所の確保は、お互いにwin-winの関係の構築となる。

ただ、気をつけなければならないのは、やはり労働災害である。いくら、元気な60歳、70歳代と言っても体力、判断力の衰えは否めない。最近では、高齢者の運転ミスにより若い何人もの命が失われている。いつまで、運転するのは人それぞれだが、免許証を返納すべき時の判断を誤ってはならない。このことについても世論では白熱した議論が交わされている。

しかし、現在、ビルメンテナンス業界において、シニア世代は重要な戦力となっているのは確かだ。最近では、外国人の技能実習制度を利用して、外国人を受け入れるのも可能だろうが、言葉の違いや、習慣、食生活、異宗教の外国人を受け入れる雇用側の体制作りに時間が掛かっていることも事実である。そうなると、マンパワーありきの、この業界でシニア世代は即戦力である。この大事な戦力を失うことは、避けなければならない。

労働災害は、ほんの一瞬の判断ミスにより大変な事故、事案になってしまう。では、それをどのように回避すべきなのか。それは、会社側の理解と働く当事者であるシニア世代の柔軟

性、そして若い世代とバランスを取った働き方ではないだろうか。シニア世代は、今までフルタイムで長時間働いてきたかも知れないが、やはり加齢に伴う体力、判断力の衰えは否めない。

そんな時は、短時間労働に切り替え、集中力を切らさず働ける環境にしてみてもどうか。日々の作業が体力的に厳しい場合は若い世代に任せるところは任せることも必要である。変に片意地を張らず、自分が習得した技術を若い世代に伝えていくこと、そして共に働くことがこれからのシニア世代に求められることであり、労働災害防止につながるのではないだろうか。若い世代には気が付かない配慮をシニア世代に補ってもらったり、技術面でシニア世代のキャリアを活かしてもらい、若い世代のお手本となってもらうことが重要である。会社サイドは、それを理解し受け入れ、シニア世代を活かした雇用環境を維持していかなければならないのである。

このような些細な一歩、お互いの気持ち一つで労働災害防止の抑止力になるのである。しかし、重用されるからと言って、シニア世代も昔は、昔は…などと言ってはならない。昔の話は、所詮むかしの話である。世代が変わって、戸惑うこともあるかも知れないが、そこは持ち前の経験で柔軟に対応しなければならないのである。

労災が老災になってはならない。パワーバランスが取れた職場に労働災害が起きるはずはない。これからの時代、シニア世代の方々には、細く長く、人生経験、仕事でのキャリアを活かし、頑張ってもらいたいものである。そして、労働災害の無い明るい職場作りに一役かって頂きたいと切に願うものである。

平成31年度 労働災害防止論文 銅賞

高齢労働者に対する労働災害防止対策

札幌施設管理株式会社 深山幸雄

1. はじめに

日本は、出生率の減少に伴い、これから超高齢化社会を迎えます。総務省と厚生労働省の平成30年度の資料によると、高齢者の割合が28.1%、全人口の4分の1を超え、労働災害発生件数全体において60歳以上の占める割合は28.1%にもなっています。

今後、相対的な総労働人口の減少による求人率の増加、また健康寿命の上昇、あるいは年金支給年齢のアップにともない勤労者の実質定年の年齢もますます上昇していかざるを得ないものと考えます。私は、高齢労働者と共に現場で働いた経験を基に、今後増えていくと考えられる高齢労働者による労働災害についての対策を論じてみたい。

2. 高齢労働者の課題

高齢労働者は、加齢にともない心身機能が少しずつ若い時と比較し劣ってきます。この具体例をあげると、

- ①生理的機能のうち感覚機能、平衡機能が劣化していく。
- ②筋力の低下が始まり、脚力、腕の筋力が落ちていく。
- ③聴覚、視力が落ちていく。
- ④体力、持続力、集中力が落ちていく。

個人差はありますが、こうした傾向は加齢を重ねていくとともに増大していくことは、高齢者が働くうえで考えなくてはならない大きなファクターだと考えます。

3. 高齢者への労働災害防止対策について

(1) 転倒や落下事故対策

労働災害のうち、最も多いのが転倒や落下事故ですが、感覚機能、平衡機能が落ちていくこと、また脚力、腕の筋肉が落ちていくことから、ますますこの危険性が増していきます。

これについては

- ①高所作業があるものについては、単独で作業をしないで若い作業員と一緒に作業する。
- ②脚立の使用にあたっては、軽量で安全性の高いものを用意して使用する。
- ③作業前に、軽い運動をして筋肉をほぐし、身体を慣らすこと。

などを心掛けさせるようにしました。

(2) その他の高齢者事故対策

高齢労働者にとって体力や集中力が、若い人

に比べて極端に低くなっていて、若い人と同じ内容の仕事が出来ません。作業内容を見直さず無理をさせると、記憶力や判断力の低下を招き、ミスなどを引き起こし怪我や事故につながります。

業務をする上で、いくつか実施した事例について報告します。

①夜間勤務に対する配慮

勤務していた職場は変則労働時間制だったため、朝早くからの勤務と夜遅くまでの勤務がありました。夜遅くまでの勤務に就いた次の日に朝早くの勤務に就くと、決まって高齢労働者の集中力が下がり、作業にもムラムダが増えました。これは、いつか危険な事になると判断されたため夜間勤務の次の日は、出来るだけ休みを入れるようにしました。

②作業内容の見直しや作業の割り当て対策労働時間に対する配慮

高齢労働者は、長時間作業や重労働は身体的、体的にも限界があります。このため作業時間、作業内容を見直しました。例えば、測定などの軽微な作業は高齢労働者に任せるなどしました。また作業の見直しにしても、若い作業員が1日で出来る作業を2日に分けて作業を組んでみたりして高齢労働者の負荷を軽減しました。こうした取組みにより、小さな事故を激減させることができました。

この様に高齢労働者の労働については、様々な労働時間の短縮や勤務の仕方を見直すことで、事故は未然に防げるものと考えます。

4. おわりに

高齢労働者に対していくつかの対策をして、成果は上がったのですが、高齢になればなるほど現場作業がきつくなり現場でも対応出来なくなってくると考えます。これについては、作業軽減できる工具、安全性の高い器具をそろえる、若い人をサポートにつけて技術教育してもらうなど若い人材の育成を高齢労働者に担ってもらうなども一方策だと考えます。

高齢労働者に対する方策をいろいろ論じてきましたが、高齢労働者の労働災害対策は、個人、現場、会社が一体となって取り組んでいかなければならない、これからの日本の大きな課題であると考えます。

平成31年度 労働災害防止論文 佳作

より安全な職場環境に向けて

札幌施設管理株式会社 藤原 努

労働災害に対する防止対策は今のままで良いでしょうか。たしかに、少し前から比べると安全に対する意識は改善されているはずですが。労働災害の発生件数も死傷者数も減少していて、それは国や関係機関の改善があったからでしょう。

しかし、大小にかかわらず労働災害は起きていて、まだ年に何百人と亡くなっております。

そこで私は、意識の循環サイクルを作るべきと考えております。三者の強い意識です。意識の循環サイクルをすることによって徐々に強くしていけることがサイクルの強みです。三者とは、「会社」、「個人」、「仲間」です。

なぜ、意識か。現在の安全対策が社会の流れや動向から行っているようにみえて、業務として安全対策を行っているように思えるからです。

たしかに、半ば強制的に安全対策を行わせるのは間違っていないし、必要な時も必要なことでもあります。

ただそれでは、本当の意味での安全を目指すことが不可能ではないか。目指すべきところは、全員がやっていて良かったと思える事、必要性があると確信して行わなければならない事だと思います。

まず会社としての意識とは、ゼロ災害で品質と信頼が得られるという強い意識を持つこと。数値では測れない価値を見出すことが会社の役目とする目標を掲げるべきです。

だから、利益よりも安全に対する費用を優先することが必要です。もちろん利益が無ければ経営は難しくなります。ただ、優先順位を変えるだけなのです。最初に考えるのは利益が「出る」「出ない」ではなく、安全を確保「出来る」「出来ない」を判断するという事です。安全に対する費用とは、安全靴やヘルメットにお金

をかけるだけではなく、安全作業ができる納期、作業場所での安全な環境を整備できるかなどです。

つぎに個人として、絶対に事故を起こさないという強い意識が必要です。時には怖い、危ない、自信がないと思ったらやめる勇気も必要でしょう。ただ作業に没頭してしまうと危険予知が薄れていくことは誰もが経験していることだと思います。

だから仲間として、作業を行わない時は監督者としての意識、作業を行っている時は監督者を信頼して作業に没頭できる環境、関係を構築していく意識が必要です。一人より二人、二人より三人での作業が安全となるよう意識することです。

これらを成し遂げるためには、会社としてのサポートが必要です。例えば、一人作業を行わせない。無事故だったことについて報酬を与える。そのことによって、安全作業に対する行動、発想を生み出し、個人個人の意識が変わっていくのではないのでしょうか。そして、会社として将来の見通しを社員に示し、どのように価値を見出していくかの目標を安全を通して見出していくことが重要です。

いまのは、一例に過ぎないですが、会社によっても環境が違うし目標も違う。すべての会社の安全対策が同じではなく、同じなのは意識のサイクルとすべきです。

サイクルが生まれれば自然と安全に対する意識は強まり、外部から絶大なる信頼を獲得すればブランドとなり、ブランド化を目指せば個人が不満を抱くことはないはずです。

安全に対する意識が当たり前になれば、社会として本望ではないだろうか。

平成31年度 労働災害防止標語 入賞者

金賞 安全は ひとりひとりの心掛け みんなでつくるゼロ災害
(株)ベルックス 西村直也

銀賞 急ぐな 焦るな 慌てるな いつでも どこでも 危険予知
北海道クリーン・システム(株) 福井 誠

危険だと 気付いたあなたが 責任者
北海道クリーン・システム(株) 齊藤 喜代子

銅賞 安全は ルールとマナーの積み重ね あなたが主役の「ゼロ災」 職場
札幌施設管理(株) 及川 治之

慣れた作業に 落とし穴 急がず焦らず 過信せず
日本クリーン北海道(株) 関原 真菜美

「まあいいか」 ゆるむ心に 潜む事故
(株)トーショウビルサービス 岩本 幸雄

佳作 合図と確認怠るな 指差し声出し危険予知
北海道クリーン・システム(株) 最首 和也

焦りやイライラ事故の元 たまに息抜きリフレッシュ 心にゆとりで安全作業
札幌施設管理(株) 笹原 孝志

一歩先 危険の芽を摘み ゼロ災害 手元・足元 安全作業
北海道クリーン・システム(株) 菅野 由紀子

あとでよい 軽い気持ちで 事故を呼ぶ
ホクビサービス(株) 高城 穰

危ないぞ 言える勇気と聞く心 みんなで作ろう ゼロ災職場
(株)クリーン開発 長谷川 勤

安全は 無理なく 無駄なく 手順良く
日本クリーン北海道(株) 若山 賢一

急がず、あせらず、一呼吸、その余裕が身を守る。
北海道クリーン・システム(株) 福岡 廣一

いつも慣れているこの場所もちょっとの油断で大事故に！！	北海道クリーン・システム(株)	阿部 ゆかり
運転は心のゆとりと思いやり	協和総合管理(株)	阿部 知 弘
気を抜くな 少しの油断が 事故招く	(株)トーショウビルサービス	安 保 祐 希
危険予知 慣れた作業に落とし穴 手を出す前にまず確認	札幌施設管理(株)	熊 谷 昌
危険予知 見たら報告すぐ改善 ゼロ災職場は みんなの誇り	北海道互光(株)	佐久間 伸
気になった それは立派な 危険予知	北海道クリーン・システム(株)	石 澤 匡 晃
今日だけと 省いた手間が 事故の元	北海道互光(株)	若 井 紗 織
気をつけよう「たしか」と「だろう」の落とし穴	北海道クリーン・システム(株)	山 本 眞利子
時間ない あせる気持ちに ひそむ事故	(株)クリーン開発	木 下 登志喜
自信と過信は紙一重 自己を戒め事故防止	(株)ベルックス	川 崎 直 人
ゼロ災害 一人ひとりの 心がけ	(株)ベルックス	田 口 恵美子
助け合い チームワークで いい仕事	ホクビサービス(株)	黒 澤 武
ベテランも 初心にかえって 再確認	北海道互光(株)	矢 根 英 子
報・連・相 習慣づけて 事故防止	(株)クリーン開発	花 田 はるみ
見る目 気付く目 注意の目 基本に戻って 再確認	北海道クリーン・システム(株)	加 藤 貴 彦
ゆずりあい やさしい運転 あなたから	(株)トーショウビルサービス	中 野 史 子
指先に 意識込めて ゼロ災害	北海道クリーン・システム(株)	研 谷 正 三
忘れるな！誰もが持ってる ヒヤリの体験 次に活かそう	日本クリーン北海道(株)	危険予知 齊 藤 裕 子
忘れるな ルールがある事 守る事	北海道クリーン・システム(株)	工 藤 由樹子